

まだ見も知らぬ

海の広さへ

それでも川は流れて

君の歌は終わることを知らず

僕らの旅がはじまる

「今、ここに 私は居て
今、ここに 私は歌う
今、ここに 私は立ち
今、ここに 私は聴く
空気、風、光、
身体を通り抜けて
空気、風、光、
心からあふれるもの…」

今日のコンサートのオープニングで歌う無伴奏女声合唱曲「今、ここに」(松下耕作曲)の冒頭である。

ぼくが係わっているEnsemble Clair,Kyoto (アンサンブル クレール、京都)とEnsemble Kiika (アンサンブル キイカ)がこの岐阜で、しかも、東海地区随一とまで言われる、ここサラマンカホールに集う。

Ensemble Kiikaとは、このグループが活動を始める時からの付き合いである。代表の夢をきくうちに、ぜひ、岐阜でその夢を叶えよう！という気になった。そんな気持ちにさせてくれる強い情熱なのだ。5年前の9月からKiikaの活動は、確か7~8人で始まった。

Ensemble Clair,Kyotoとは、昨年からの付き合いである。グループが立ち上がったからは指揮者を置かず、客演で指揮者を招いていたようだが、5周年記念コンサートを終えて、次に向けてということでお声かけいただいた。教会などを会場に昨年8月から始めた「華なりコンサート」は3回を数えた。毎回、ユニークなテーマでコンサートを組んでいる。

そもそもぼくはそんなに知られた存在でもないし、よくぞ見つけてくれたと思う。だからこそ、その期待に応えるべく、いかに毎回の練習の満足度を上げるかということと、いいアンサンブルにするかということと、毎回の練習への行き帰りに、考え尽くしてきた。もちろん初めから順風満帆というわけではなく、まさに集ってくるメンバーの力が今のKiika、Clairをつくりあげた。そして、これからのKiika、Clairのことを考えるとその責任と楽しみとでドキドキワクワクするのだ。

「今、アンサンブル」集い、歌う。

さて、今回のジョイントコンサートは、Kiika、Clairのそれぞれの持ち味が活かされることはもちろんだが、コンサートプログラムとしても聞き応えのあるものとした。

Kiikaの日本に歌い継がれて来た民謡や子ども歌、Clairのマジャーレ (ハンガリーの人たちは自分たちをマジャーレと呼ぶ)の歌、そして、2つの団がともに奏でる「石若雅弥の心象」と「三善晃の唱歌の世界」華やかな響きがサラマンカホールに花咲くものと思っている。

Kiikaが歌う「日本の歌、日本の響き」は、間宮芳生作曲「五つのわらべうた」から「ずいずいずいころばし」「烏かねもん勘三郎」「天満の市は」「さんさい踊り」の前にあえて、信長貴富編曲の沖縄の「ていんさぐぬ花」を置いた。もちろん、8月のこの時期には先の大戦のことを心のどこかに留めているだろうし、最も被害の大きかった沖縄のことを意識してしまう。この後に続く間宮作品と対比的にあえてこの曲を選曲した。

わらべうたには、日本の音楽の土台である音組織の最も明快で、純粹な素形があらわれている。そして、旋律やリズムと言葉の生き生きとした関係がある。それらを十分に生かしながら、民族的な多声的音楽のひびきをつくり出すことができる。こうした編作 (そして演奏にも) において、最も大切にされるべきは、わらべうたの本質である。生き生きと躍動する生活感覚だ。このことは強調しすぎるということは決してあり得ないと思う。・・・と作曲者は言う。

若い頃、興味を惹かれる作品の中に間宮芳生の作品があった。日本の素材をもとに作曲した、インベンションやコンポジション。決して他の作曲家の作品とは違って、日本の素材に懐かしさを感じさせない作品だと感じていた。しかし、いざ自分がやるとなると…。楽譜を読んでいても

とても手出しできない感じを持っていた。その頃、田中信昭さんが指揮する東京混声合唱団の合唱のためのコンポジションを聴いた。衝撃的だった。およそ自分がイメージしていた演奏でも指揮でもなかった。拍節を感じさせない、小節線も感じさせない演奏だった。よけいに手出しできなくなってしまい、あれから30年がたった。

マジャーレとはハンガリーのこと。ハンガリーの人たちは自分たちのことをマジャーレと呼ぶ。Clairが歌う「マジャーレの歌、マジャーレの響き」は、コダーイとコチャールの作品を選んだ。

コダーイは20世紀前半に活躍した。ブダペスト大学で学びながら、同時にリスト音楽院で学び、ハンガリーの村々をまわって民謡や踊りを採集して多くの論文を書いた。そして、民謡や踊りをベースとした作品を発表していった。20世紀に入ってひとつの流れとしてできてきた「民族主義音楽」にコダーイが与えた影響は計り知れない。

コダーイの作品として「山の夜I」と「詩篇150番」を演奏する。コダーイはヴォカリーズ (母音で歌う歌) で歌われる「山の夜」をその生涯で5曲作曲している。コダーイは、山々は声を持つと主張し、コダーイの研究者によれば、山の夜は「幅広い限界を開いた特別な芸術作品で、果てしなく静かでほとんど永遠的な感じを生み出していて、人生の多くを切り抜け、狂乱するひとびとから逃れて本質的な心の安らぎを求める一人の作曲家を映し出している」という。

合唱 (アンサンブル) とは何とも奥深いものなのだろう。合唱はお互いの信頼がなければ成り立たない。豊かなハーモニーは曲の内面を表すだけではなく、友情の深さ、博愛の深さを表している。そして、音楽でありながら、音だけではなく言葉がある。言葉に共感し、勇気づけられ、励まされる。私たちが日々の中で見つけ、磨いてきたこの音楽の素晴らしさをお届けしたいと思う。